

予備教育での「話しましょう」の試み
—教科書で学ぶ日本語と実際の日本語使用への橋渡し
(2000年度を中心に)—

木戸光子 長能宏子 山崎由喜代 渡辺恵子

要 旨

本稿では、2000年度予備教育日本語コースにおける、教科書とは別の会話の練習を目指した試みについて報告する。まず、過去4年間の同じような試みについて簡単にふれる。次に、2000年度の試みについて、事例をあげて詳しく述べる。さらに、この試みに対する学生による評価の資料から、問題点を指摘する。また、ボランティアの参加の位置付けについて考察し、最後に今後の展望を示す。

【キーワード】 会話 「話しましょう」「お楽しみ」 評価 ボランティア

A Trial of “Let’s Talk” (「話しましょう」) in the Intensive Japanese Course : building a bridge between the Japanese textbook and practical use of Japanese focussing on the academic year 2000

Kido, Mitsuko Naganou, Hiroko Yamasaki, Yukiyo Watanabe, Keiko

Abstract

This article reports a trial of Japanese conversation practice unrelated to the Japanese textbook in the Intensive Japanese Course in the academic year 2000. The report first introduces briefly similar trials in the past four years, and then gives details about several trials in the academic year 2000. The report further points out problems, based on the students' evaluations. It also considers the role of volunteers and suggests possible developments for the future.

1. なぜ予備教育で「話しましょう」を始めたのか

予備教育で主教材としてSFJ⁽¹⁾の試作版を使い始めたのは1990年前後のことであった。その後まもなく、教科書の練習だけでは学生の会話能力がのびないということで、クラス間の交流も兼ねて、「オープンクラス」が試みられた。それは、週1コマ程度、クラスのメンバーを入れ換え、テーマを決めて自由に話し合うというものである。これが「話しましょう」のような活動を授業として取り入れるきっかけになったと思われる。それ以前にも、90年代前半からは、教師以外の日本人との交流の中で自然に日本語を使う活動（家庭訪問、研究所見学など）は時折試みられていた。

このような試みは、単発的なものもあり、必ずしも定期的に引き継がれていたわけではないが、担当者が代わっても、形を変えて続けている。それは、担当者間で合意があったかどうかは別にして、SFJだけに頼ってはい実践力がつかないという認識があったからではないだろうか。また、每期続けている学生からのコース評価では、90年代後半頃から「もっと話す練習をしたかった」という意見が出てきたということもあるだろう。

以上のような経緯で2000年度の「話しましょう」が始まった。

2. 1996年度から1999年度までの「話しましょう」の試み

SFJや既成の教科書を使わない話す活動の授業については、2000年度以前にも每期いろいろな形で似たような試みがあった。ここでは、主に1996～1999年度の4年間を中心に、当時の記録や担当者の話などを手がかりにして、簡単にまとめてみたい。

なお、ここでは、以下の活動についてはふれないことにする。

- ①恒例になっている毎学期2回の研修旅行、スピーチ
- ②異文化理解を目的とした「カルチャークラス」⁽²⁾
- ③SFJ以外の授業で読解、作文など会話中心でないもの
- ④SFJ以外の既成の教科書を使ったもの（『ロールプレイで学ぶ日本語』など）
- ⑤SFJの場面会話の実習（レストラン、郵便局など）

1996～1999年度の授業記録から、SFJや既成の教科書を使わない話す活動の授業を拾い出してみると、次のようないくつかのタイプに分けられる。

- ①**イベント型**：七夕、書初め、料理、合気道など、参加しながら日本の文化に触れる。
- ②**日本事情型**：日本人の生活や考え方について、ビデオ、読物などを使って話し合う。
- ③**雑談型**：適当な話題で自由会話。ボランティアが参加することもある。
- ④**コミュニケーションタスク型**：情報取り、インタビュー、ゲームなど。
- ⑤**ディスカッション・ディベート型**：与えられたテーマや資料に基づいて話し合う。

学生が前もって準備することもある。

- ⑥スピーチ型：口頭発表、準備が必要な長いものと3分間程度の短いものがある。
- ⑦プロジェクト型：アンケート調査報告、ドラマ作りなど。1コマ以上使うことが多い。

また、この種の授業の基本的な特徴として次のような点があげられる。

- ①SFJに沿った授業⁽³⁾とは別のものである。
- ②クラスのメンバーを入れ換えたり、合同にしたりすることがある。
- ③ボランティアなど教師以外の人に参加することがある。
- ④教室の外で行われることがある。
- ⑤通常の授業と比べて参加者の自発性がより求められることが多い。

1996から1999年度までのこの種の試みの主なものは次の通りである。なお、(春)は春学期、(秋)は秋学期を示す。

1996年度

- <クラス共通で定期的> 「Activity」(秋)：コミュニケーションタスク型、雑談型
- <クラス単位で定期的> 「文化理解」(春/秋、既習クラスのみ)：日本事情型
- 「習字」(春、既習クラス)：イベント型
- 「発表練習」(春、既習クラス)：スピーチ型
- 「自由会話」(春)：ディスカッション・ディベート型

1997年度

- <クラス共通で定期的> 「Conversation」(春/秋)：コミュニケーションタスク型、雑談型など

1998年度

- <クラス共通で定期的> 「会話」(春/秋)：コミュニケーションタスク型、雑談型など
- <クラス単位で定期的> 「文化とコミュニケーション」(春、既習クラス)：日本事情型など
- <クラス単位で数回> 「自由会話」(春、既習クラス)：スピーチ型
- 「インタビュープロジェクト」(春、既習クラス)：プロジェクト型
- 「会話ドラマ」(秋、既習クラス)：プロジェクト型

1999年度

- <クラス共通で定期的> 「会話」(春/秋)：コミュニケーションタスク型、雑談型など
- <クラス単位で定期的> 「ディスカッション・ディベート」(春、既習クラス)：ディスカッション・ディベート型

1996年度秋学期からはクラス共通のコマが設けられるようになったが、期によっては、コマが同じでも内容が別々のこともあった。また、既習クラスは独自のプログラムを試みることも多かった。1998年度の「会話」ではコマも内容も共通のプログラムで行われ、1999年度も同じ

プログラムを参考にして引き継がれた。

ボランティアは、学生、社会人などで、教師が活動の内容によって、必要な場合をお願いするという形であった。

3. 2000年度予備教育での「話しましょう」の試み

2000年度予備教育全18週のカリキュラムでは、原則として毎週火曜日4限目が「話しましょう」(秋学期は「お楽しみ」と改名)にあてられた。しかし、スピーチ、一泊旅行、戸外学習など定例化している催しもあり、毎週、この授業を行なったわけではない。また、A、B、C、D 4クラスのうち、1クラスは既習クラス、1クラスは進度の遅いクラス、2クラスは標準クラスであったため、既習クラスと進度の遅いクラスは通常の日本語の授業の都合で、毎回、「話しましょう」に参加したわけではなかった。「話しましょう」(「お楽しみ」)は標準クラスを念頭において始めた試みといってよいだろう。

以下に2000年度春学期と秋学期において、上記の「話しましょう」としての枠で行なった試みをリストにして示す。なお、秋学期には「話しましょう」から「お楽しみ」に名称を変更したが、その経緯、良かった点、問題点については3.3で述べる。

3. 1 2000年度における試み

春学期 「話しましょう」

月/日	第～週目	内 容	ボランティア数	参加したクラス
5/2	4	連休の予定について・すごろく (「～んですか」のQA) 会話	0 0	A B
5/9	5	連休について話す 自分の国・連休について話す	0 1	A B
5/16	6	スピーチ「私の国」に備えて小会話 来日後の経験を話した後、報告	0 0	A B
5/23	7	自分の国について話す ペアで国の情報収集	0 0	A B, C
5/30	8	お互いの国の情報を収集し比較する	0	A, B
6/20	11	ゲーム・自由会話	2	A, B, C
6/27	12	自由会話(自分の国、つくばについてなど)	4	A, B, C
7/4	13	七夕/短冊書き/祭り	5~6?	A, B, C, D
7/11	14	日光旅行のオリエンテーション・質問作り	0	A, B, C, D
7/18	15	「誘い」の練習(casual styleの練習)	0	A, B, C

秋学期 「お楽しみ」

月/日	第～週目	内 容	ボランティア数	参加したクラス
10/24	2	名刺作り／自己紹介／報告	0	A, B, C
10/31	3	お習字 (好きなひらがな言葉)	0	A, B, C
11/7	4	お習字 (好きなカタカナ言葉)	0	A, B, C, D
11/15	5	合気道 (講師による指導、体育館で)	0	A, B, C, D
11/28	7	ゲストと国やつくばについて話す	8	A, B, C
12/5	8	年賀状 (指導教官へ)		
		相撲見学オリエンテーション	6	A, B, C, D
12/19	10	バザー	6	A, B, C, D
		・・・ 冬休み ・・・		
1/9	11	書き初め (句、文)	0	A, B, C, D
1/23	13	伊豆・鎌倉旅行について話す	5	C, D?
1/30	14	先輩の話を聞く (英語で)	3+先輩	A, B, C, D
2/6	15	寿司作り	8	A, B, C, D
2/13	16	ゲーム「それは何ですか」	0	A
2/20	17	しりとり、ゲーム、かるた	0	A
2/27	18	カラオケ	0	A

3. 2 2000年度の試みからの事例報告

上記の試みの中から2、3の事例について以下に詳しく述べる。

3. 2. 1 自由会話「ゲストと国やつくばについて話す」(A教室の場合)(2000.6.27)

時期：第12週目、S F J第16課(可能動詞・授受動詞・～よう形)終了後

参加者：学生5名、ボランティア2名(日本語日本文化専攻男子学生1名、留学生の出身国に関心のある他の専攻の学生1名、教師2名)

準備：特になし

活動：まず各自自己紹介をし、次に、主としてボランティアが留学生に出身国について質問をし、留学生が答えるという形でやりとりがあった。つくばが話題になることはほとんどなかった。程なく、ボランティア自身とその生活に話題が移り、大学を出たらどんな仕事をしたいか、いつ頃結婚したいかなど、留学生からボランティアに対して活発に質問が出て、終了時間まで続いた。留学生同士が質問し合ったり話し合ったりすることはほとんどなかった。

ボランティアは、日本語が不自由な留学生のことを意識しつつも自然な日本語で答えていた。1人の学生に発言回数が過度に偏らないように教師が何度か介入した。また、ボランティアが留学生にわかるようにどう説明したら良いかなど困った時に、言いかえる、ごく簡単な英語で説明をする、黒板にその語を書く、などした。

学生の様子：全体的に楽しい雰囲気、留学生は促されることなく、全員が自発的に質問し、他の人のやりとりを集中して聞き取ろうとしていた。途中から留学生の一人が独占的に質問する傾向が見られた時があったが、教師の介入で全員が発言できるようになり、全員、満足感を持って終えたようであった。

反省と問題点：教師が与えた話題についてはあまり話されなかった。その理由として、前もって話題を知らされていなかったために、どのような会話をするのかイメージを持って臨むことができなかったこと、話題に興味を持てなかったことが考えられる。教師が与えた話題で話すことを期待するならば、参加者が話したい内容であるように配慮することが必要であった。

フィードバックをしなかった。どのように言えばうまく言えたのか、またボランティアの言わんとしたことは実は何だったのかを、数を絞って整理するという形でフィードバックがあったほうが良かったのではないかと。目的のないただの「お喋り」だといずれは飽きてしまうのではないかと。

留学生が積極的意欲的に取り組み、満足感を得て終えることができたのは、第一に、この時が「生の日本人」と話す2回目の経験で新鮮だったこと、比較級・最上級、「～たら」・「～と」・「～とき」、「～てから」・「～前に」、そして、授受動詞などの文型が既習であったことが考えられる。「話したい」という意欲をどのように持続させられるかが課題である。

3. 2. 2 祭り・七夕 (2000.7.4)

時期：第13週目、SFJ第17課(受け身)終了後

場所：A教室、C教室

参加者：学生18名、教師4名、ボランティア5～6名

準備：①短冊を飾るための大きな竹の枝(事務の方にお願ひした)

②簡単な七夕の由来に関する説明(日本語で)

③短冊用の色紙、筆ペン、はさみ、のり、ひも、セロテープ

グループ：2グループ(A教室でのグループの場合：学生10名前後、ボランティア2～3名、教師2名)

活動：①最初は合同で七夕の説明(伝説)を聞いた。

②自分の国の祭りについて紹介した。

③その後2グループに分かれボランティアの方にアドバイスを受けながら、自分の夢や希望、好きな言葉などを書いた。

④書いた短冊をロビーに立てた竹に飾った。

学生の様子：

①自分の国の祭りについて話すのはかなりの日本語力があるので、話したくても話せな

いというのが実情のようであった。

- ②短冊書きは、家族のこと、自分の将来のこと、好きなことばなどを書いたので楽しそうだった。竹に飾った短冊はきれいで喜んでいた。

反省と問題点：

- ①簡単な説明とはいっても「星、天の川、機織り、羊飼ひ」など、知らない単語がキーワードなのでどうしても必要な単語は英語・日本語の両方での説明となった。
- ②紙芝居があればもっと良かったであろう。
- ③国の「祭り」を紹介してもらうには、この時点（日本語開始2ヶ月余り）では少々無理であった。結果として既習だった一人がイギリスの「ガイフォークス」の話をしただけであった。聞いてもわからない学生が大部分というのはさらに問題であった。前もって準備をしていればもっと話す学生がいたかもしれない。
- ④短冊のための表現「～ように」は未習のため、「～たいです」、「～てください」も可としたが、書きたいことを日本語で何というのか教えても良かった。
- ⑤この活動を日本語の学習の一環として見るか、文化活動「お楽しみ」として見るのかによって評価が異なる。話すことも大切だが、皆が聞いてわかることも大切であろう。

3. 2. 3 バザー (2000.12.19)

時期：第10週目、SFJ第12課（自他動詞・～たら/と）終了後

場所：A教室、C教室

参加者：学生20名、教師4名、ボランティア6名（全員女性）

準備：事前に教師に出品を呼びかけ、衣類、雑貨、本、文房具などを集めた。あらかじめ、教師が品物を4つの山に分けておいて、各グループに2山ずつ分配した。

グループ：グループ1 学生(10) + ボランティア(3) + 教師(2)

グループ2 学生(12) + ボランティア(3) + 教師(2)

活動：①グループごとに品物に値段をつけたり並べたりして出店の準備をした。値段の付け方はクラスごとに相談して決めた。(10～200円程度)

②店員と客の役割を途中で交代し、客になった人は外のグループで買い物をした。

③売上を計算し後片付けをした。ほぼ完売し売上金額は約1万円であった。

売上は旅行のお菓子や飲物に使うことにした。

学生の様子：買い物に夢中になったり店員の役割を楽しんだりしていたが、日本語でのやりとりは、個人差もあるが比較的簡単なものに限られていた。最後の方では完売をねらってさらに値下げしたグループもあった。後片付けは時間のある学生だけで手伝った。またやりたいという声もあった。

反省と問題点：学生は楽しんでいたが、教師の側で一方向的に決めたイベントであったためか、活

動は受け身的であった。事前に学生とバザーの目的とやり方などを話し合っ、もっと学生が主体的に参加するような形にすれば、会話がさらに活発になったかもしれない。

イベント的な活動では、参加者がイベントを楽しみながら自然に日本語でコミュニケーションできることが大切である。そのような場を提供することが教師の基本的な仕事になる。会話活動としては、買物のやりとり以外にも、品物の由来や使い方を話題にするなど色々な可能性が考えられるが、いずれも参加者の自発的な活動になる。以上のことをふまえて、今回のイベントを日本語を使う活動として見た時、良かった点は、学生が自分の日本語のレベルで自発的に会話ができただことである。反省点は、ほとんどの会話活動が簡単な買物のやりとりに限られたことである。会話を活発にするためには、事前に、バザーでどんな会話が考えられるかシミュレーション練習をするとか、準備から学生に参加させるなどして、学生の意識化を図る工夫が必要だと思われる。ただし、その場合は1コマだけで授業を完結させるのは難しいだろう。

3. 3 「話しましょう」から「お楽しみ」に変わったことについて

春学期は話すことを重視した活動であったが、秋学期はイベントを楽しむ活動に重点が移っていった。それに伴い、名称も「話しましょう」から「お楽しみ」に変更した。それは、もっと広い視点から日本語や日本文化を楽しんでもらいたい、また、日本語の背景にある日本文化を楽しみながら知ってもらいたいということも理由の一つである。話す力をつけるためには、もっと会話重視の活動を試みたほうが良かったのかもしれないが、逆に会話クラスの枠を外したことによる良い効果もあった。以下に、良かった点、問題点を記す。

<良かった点>

- ①日本語という「勉強」から離れて開放感の中で日本に触れられた。
- ②日本語の勉強が好きでない人、苦手な人にはストレス解消や息抜きとなった。
- ③日本語の授業で元気がなかった人がイベント的活動がきっかけとなって才能を発揮できて日本語の授業でも元気になった例もあった。

<問題点>

- ①必ずしも日本語を使わなくてもすむ活動があった。
(例：寿司作り、合気道など)
- ②教師にとっては、いわゆる通常の日本語の授業以外の能力、時間が要求される。
活動を充実したものにしてしまうと準備のための時間、労力が要る。
(例：合気道、バザーのための品物集め、ボランティアを集めることなど)

しかし、問題点、改善すべき点はあるものの、6ヶ月という忙しい集中コース、またつくばという地域性を考えると、教科書以外で学生に楽しみながら日本文化、日本事情に触れる時間をもってもらえるのもよいのではないかという教師側の意見が多かった。

3. 4 前もって学生に準備させて話させることについて

7月4日の試みの一環として、自分の国の祭りを紹介してもらうことにしたが、学生に前もって準備してくるようにならなかったため、既習者の1名が自国イギリスの「ガイフォークス」という祭りについて話してくれただけであった。この点について、教師の間で「前もって準備させてきて話させるほうがいい」という意見や、「準備させると、辞書を使って難しい単語を使うことになるので、本人のためには勉強になるかもしれないが、聞いている仲間の学生にはかえってわからなくなる」、「話させることも大切だが聞いてわかることも大切なのではないか」、「その場で本当の意味での実力で話させることも大切なのではなか」という意見があった。以下に準備させて話させることの良い点、問題点をあげる。

<良い点>

- ①その場で文を作れない人に発話の機会を与えることになるし、文法、語彙などを考えたり、選んだりする時間があるので、より正確、より豊かな発話ができる可能性が高い。
- ②習ったことの復習にもなり、新しい表現への挑戦にもつながる。

<問題点>

- ①前もって準備することにより、相手の言うことを聞いて反応しながら発話するという臨機応変な発話を規制することになる。
- ②スピーチの場合、辞書や本から写したり、知人・友人に書いてもらってそのまま発表する可能性がある。
- ③宿題の多い集中コースの中では、学生にとって宿題として負担になる。

どの程度の準備を学生に期待するか、また準備させるかは、授業の形態（発表形式、雑談形式など）にもよるであろう。しかし雑談形式でも、トピックくらいは前もって学生に知らせておいたほうが心の準備もできるのではないだろうか。

4. 2000年度における学生からのアンケートに見られる評価

学生と教師に対して、コースについてのアンケートが行われた。学生に対しては、前期及び後期のそれぞれについて各期の開講から12週間後と終了時の2回、計4回のアンケートが行われた。これらのアンケートはコース全体についてのもので、その中に春学期の「話しましょ」と秋学期の「お楽しみ」が含まれている。クラスによっては、授業参加がイベント型のものに限られていたり、質問項目が期やクラスによって一部違っていたり、回答提出がなかったりした。これらを踏まえて、アンケート回答結果に見られる学生からの評価について報告する。

4. 1 学生に対するアンケートの質問の内容と形式

学生に対するアンケートの質問項目には3つの形式があった。第一の形式は、役に立ったも

の、おもしろかったもの、役に立たなかったもの、おもしろくなかったものを、SD (Structure Drills、文法のこと) や漢字や「話しましょう」などの授業からそれぞれ4つ選ぶもので、終了時のみの質問項目である。第二の形式は一つの授業について、“OK”、“need more exercise”、“exercise can be done by yourself”、“unnecessary exercise/this class should be optional”、“other comments”の5つの選択肢の中から選ぶ形式である。第三の形式は、選んだ後でそのコメントを書く形式である。その中で、「話しましょう」と「お楽しみ」に関するものについて以下に述べる。

4. 2 「役に立った」か、「おもしろかった」か

表1と表2は「役に立ったか」、「おもしろかったか」という質問に対する春学期と秋学期のアンケート結果である。これを見ると、「話しましょう」と「お楽しみ」に対して学生が異なる感想を持っていることがわかる。「話しましょう」では「役に立った」と「おもしろかった」が同じ5名であるのに対して、「お楽しみ」は「役に立った」が1名のみ、「おもしろかった」は7名であった。また、「役に立たなかった」は「話しましょう」では0名、「お楽しみ」では2名、そして、「おもしろくなかった」は「話しましょう」、「お楽しみ」ともに1名であった。このことから、「話しましょう」は楽しく役に立つ時間で、「お楽しみ」は学生にとって元気になれる時間であると言えるだろう。

では、どのような学生が「役に立った」、または、「おもしろかった」と答えたのだろうか。表1を見るとわかるように、「話しましょう」が「役に立った」と答えた5名の内訳は、進度の速いクラスの2名、既習クラスの3名で、他のクラスは0名であった。日本語学習が比較的順調に進んでいる学生は、日本語力増進に注意が向きやすい傾向があると思われる。

表1. 春学期終了アンケート結果（「役に立った」か「おもしろかった」か）

「話しましょう」	標準クラス	速いクラス	既習クラス	遅いクラス	計
役に立った	0	2	3	0	5
おもしろかった	3	1	1	0	5
役に立たなかった	0	0	0	0	0
おもしろくなかった	0	1	0	0	0

* 数字は回答者数

* 春学期の学生総数は19名であるが、必ずしも全員がアンケートに答えたわけではない

表2. 秋学期終了アンケート結果（「役に立った」か「おもしろかった」か）

「お楽しみ」	標準クラス	速いクラス	既習クラス	遅いクラス	計
役に立った	0	1	—	—	1
おもしろかった	4	3	—	—	7
役に立たなかった	1	1	—	—	2
おもしろくなかった	1	0	—	—	1

* 数字は回答者数

* 春学期の学生総数は19名であるが、必ずしも全員がアンケートに答えたわけではない

4. 3 “OK” か “need more exercise” か

全体で見ると、「話しましょう」も「お楽しみ」もコースの中間時より終了時のほうが“OK”がやや少なく、“need more exercise”が多少増えていることがわかる。クラスの傾向を見ると、「話しましょう」、「お楽しみ」とも、標準クラスは、“OK”が多少増え、“need more exercise”が多少減っている。進度の速いクラスを見ると、標準クラスとは反対に“OK”が大幅に減り、“need more exercise”が大幅に増えている。春学期のみ回答のあった既習クラスを見ると、“OK”も“need more exercise”も減少している。

表3. 春学期中間時と終了時のアンケート結果（“OK”か“need more exercise”か）

「話しましょう」	標準クラス	速いクラス	既習クラス	遅いクラス	計
	中→終	中→終	中→終	中→終	中→終
OK	6→3	4→1	1→2	0→0	11→6
need more	5→2	1→4	5→4	1→1	12→10
yourself	0→0	0→0	0→0	0→0	0→0
optional	0→0	0→2	0→0	0→0	0→2
other comment	0→0	1→0	0→0	0→0	1→0
計	11→5	6→7	6→6	1→1	24→18

* 数字は回答者数

* 春学期の学生総数は25名であるが、必ずしも全員がアンケートに答えたわけではない

* need more は need more exercise の略

“yourself” は exercise can be done by yourself の略

optional は unnecessary exercise/this class should be optional の略

表4. 秋学期中間時と終了時のアンケート結果（“OK”か“need more exercise”か）

「お楽しみ」	標準クラス	速いクラス	既習クラス	遅いクラス	計
	中→終	中→終	中→終	中→終	中→終
OK	2→4	5→1	—	—	7→5
need more	3→3	2→5	—	—	5→8
yourself	1→0	0→0	—	—	1→0
optional	0→0	0→1	—	—	0→1
other comment	0→0	1→1	—	—	1→1
計	6→7	8→8	—	—	14→15

* 数字は回答者数

* 春学期の学生総数は25名であるが、必ずしも全員がアンケートに答えたわけではない

* need more は need more exercise の略

“yourself” は exercise can be done by yourself の略

optional は unnecessary exercise/this class should be optional の略

以上の結果から、標準クラスはこの時間のあり方に対して肯定的で、進度の速いクラスはさらに多くを期待していることが考えられる。“exercise”の内容が何を指しているかが特定されていないが、「話す練習」と考えるのが妥当である。そうであれば、進度の速いクラスは内容的にイベント的な活動ではなく、「話すこと」を重視したいのだと理解するのが妥当であろう。しかし、イベント的要素を含めて、現状を量的に強化することを希望している可能性も否定できない。

既習クラスはこの時間が全クラス混合で行われたために、レベル的に物足りなかった可能性があるが、事例が少なく断定はできない。“OK”と回答した上で“It’s enough”とコメントしてあった例があり、“OK”や“need more exercise”が否定的意味合いで捉えられた可能性がある。

4. 4 春学期と秋学期の期末アンケートに書かれたコメントから

判読不可能の幾つかを除き、「積極的にこの時間に期待する」、「現状を改善する形で期待する」、「この時間についてもっと考えることが必要である」、「その他」の4つに大きく分けた。原文は英語のみ、英語と日本語、あるいは日本語のみで書かれている。できるだけ原文の意味をくみ取り、以下に分類して示す。(回答は複数にまたがる。数字は回答者数を示す。より詳しいコメント内容は末尾資料参照)

<積極的にこの時間に期待する> (計18)

- ・語学習得には話すことが大切／必要である(8*自然に話せるようになる、日本語で話すことを強いられて良い、などを含む)
- ・もっと時間をかけたい(4)
- ・おもしろい(2)
- ・コースの初期からはじめたほうがよい(2)
- ・日本人と接することができて良い(1)
- ・よかった(1)

<現状を多少改善する形で期待する> (計10)

- ・トピックの選択が大切である(4)
- ・トピックを事前に学生に知らせてほしい(3)
- ・準備が必要である(2)
- ・学生間の自由会話が欲しい(1)

<この時間についてもっと考えることが必要である> (計3)

- ・課題を決め、達成することが大切である。自分はこの時間に何を身につけたらだろうか(1)
- ・目的性が要る(1)
- ・まだ話せるようになっていない(1)

<その他> (計2)

- ・もっとクラスで（練習したい）（１）
- ・十分である（１）（肯定的か否定的か不明。本人は“OK”と回答）

もっとも多かったのは、話すことが大切で必要だというコメントである（８）。その中には、「文法の問題はないが話せない」、「話すことは語学で最も難しいところだ」、「話すことによって上達する」、「話さなければならない状況に追い込まれるので、抵抗感が取り払われてしまう」など、日本語上達を強く意識したコメントがあった。「もっと時間をかけたい」（４）を含めるとコースの約半数の学生が話すことの大切さを挙げていることになる。表現は様々だが、話すことに重きを置き、有効であると考えていることがわかる。

次に多いのがトピックの選定が大事であること（４）、事前にトピックを学生に知らせておくこと（１）である。これと関連して、教師、学生の双方が準備をして臨むこと（２）、目的が必要なこと（１）、トピックを事前に知らせて欲しい（１）、などがあったが、これは準備をして臨みたいという気持ちの表れと言える。課題を特定してそれを達成することが大切で、自分にとって、この時間がどの程度勉強になったか疑問だというコメントもあった。これらのことを考えると、多くの学生に肯定的に受け止められているとはいえ、コメントで指摘された内容にもとづいて考慮し、改善が求められていると言える。なお、フィードバックを求めるコメントはなかった。

以上をまとめると次のようである。まず、「話しましょう」や「お楽しみ」に対して、標準クラスは「おもしろい」で評価する傾向があり、進度の速いクラス、既習クラスは「役に立つ」かで評価する傾向がある。次に、“OK”、“need more exercise”からは標準クラスは現状肯定を、進度の速いクラスはより多く話す練習を望んでいると思われる。

コメントからは、学生は話題を選び、事前に準備を十分にして日本人ボランティアと大いに話すことが、話す力を付けるために望ましく必要だと考えていることがわかった。つまり、おもしろい要素を維持しながら、クラスレベルを考慮した内容を準備することが大切だということになる。授業内容の改善と充実を図るためには、学生からの評価をより詳しく知ることが大切である。そのためには、「話しましょう」や「お楽しみ」に対する独自のきめ細かいアンケートを実施するなど、「話しましょう」や「お楽しみ」により焦点を当てたアンケートが必要である。

5. 秋学期「話しましょう」についての感想およびボランティアのアンケート結果の報告

5. 1 秋学期「話しましょう」全体についての感想

よかった点としては、次の４つが挙げられる。第一に、学生に普通の日本人と話す場を提供できた。第二に、様々な活動を通して日本語を使う機会を増やせた。第三に、ボランティアの呼びかけ・連絡役をしてくださる方がいたおかげでボランティア参加が毎回５名以上あった。第四に、ボランティアは毎週参加でなく自由参加にしたので参加しやすかったようである。

反省点としては、次の3つが挙げられる。第一に、通常授業とはあまり関連づけなかったため、予備教育コースの全体の目標と「話しましょう」の授業目標の関連がなかった。しかし、あえて教科書と関連づけずに教科書と切り離したために、学生に自由に話す機会を提供できた面もある。授業シラバスを意識して様々な活動をしたほうがよいのか、逆に授業シラバスにとられないほうがよいのか、現時点では判断がつかない。第二に、教師側の準備が大変で負担が大きい活動の時があった。料理など準備段階から学生やボランティアの有志を募ってやってもらうなどしたほうがよかったかもしれない。毎回授業外の時間を取られるのは学生にもボランティアの方にも負担になるだろうが、一学期に2、3回程度、または希望者のみならば可能ではなかろうか。第三に、毎週1コマ(75分)に授業を限ったが、料理のような活動は作るだけで終わって、食べながら話す時間がゆっくり取れなかった。活動によっては1コマ以上とってやったほうがよい。

5. 2 日本人ボランティアの評価とボランティア募集・連絡

5. 2. 1 ボランティアに対するアンケートのまとめ

2000年秋学期は15名の日本語ボランティアの方(民間人)にアンケートの葉書を送り、14名の方から返答が来た(うち1名は自由記述のみで返答)。

<アンケートの質問内容>

質問1. 参加した授業活動に○をおつけください。

<日付> <授業活動>

- | | | |
|-----------|---------------|------|
| () 11/28 | 国のことなどについて話す | 7名参加 |
| () 12/5 | 年賀状を書く | 6名参加 |
| () 12/19 | バザー | 5名参加 |
| () 1/23 | 伊豆・鎌倉旅行について話す | 5名参加 |
| () 1/30 | 先輩の話を聞く | 3名参加 |
| () 2/6 | すし作りと試食 | 8名参加 |

質問2. 今回行った以外で何か授業活動のアイデアがありましたら、お書きください。

質問3. 来学期も日本語ボランティアをしてみたいと思われませんか。

() はい / () いいえ

「はい」と答えた方にお聞きします。どの程度なら参加できますか。

- () 毎週できる
 () 時間がある時
 () 興味のあるテーマの時 (興味のあるテーマをお書きください)

質問4. 日本語ボランティアとして参加してみてのご意見、ご感想など自由にお書きください。

表5. 日本語ボランティアへのアンケート集計結果

日本語ボランティアアンケート集計結果 予備教育2000年度秋学期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
質問1 参加した授業活動に○をおつけください。															
11/28 国のことなどについて話す	○	○	○			○	○	○	○						
12/5 年賀状を書く	○	○	○	○		○	○								
12/19 パワー	○	○	○	○	○				○						
1/23 伊豆・鎌倉旅行について話	○	○	○	○	○			○		○					
1/30 先輩の話聞く	○	○	○	○	○						○	○	○	○	
2/6 すし作りと試食	○	○	○	○	○										
質問2 今回行った以外で何か授業活動のアイデアがありましたら、お書きください。	抹茶と和菓子食べながら、話をする、おし紙		ゲーム等 (伝言ゲーム、しりとりなど)			自国の語り (日本では益讀) / 何かした、話等、	小学校の日本語ボランティアでは、おひな祭りや七夕、日本の行事をやったりゲームをしました。			グループディスカッション、日本の文化に触れる。茶道・和服・前を見る。	少人数なら茶道、和菓子を食べ、抹茶をのむ、お手紙をあそび→豆まき→舞→笛払い→春を待つ、梅見花見→日本の花について、お話し、ひな祭り。				
質問3 来学期も日本語ボランティアをしてみたいと思えますか。	はい / いいえ	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	
「はい」と答えた方にお聞きします。どの程度なら参加できますか。															
毎週できる					△隔週										
時間がある時	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
興味のあるテーマの時										○					
(興味のあるテーマをお書きください)														料理	
質問4 日本語ボランティアとして参加してみteのご意見、ご感想など自由にお書きください。	いろいろな国の人と話ができて楽しかった。英語の練習 (留学生など) の人がグループに入ってくれた。	いろいろな国の方と話す機会ももてた。日本生の方が良い印象を持ってもらった。	楽しい体験だった。	いろいろな国の方と話ができて楽しかった。仕事を休んでいる方も参加した。都合が良い。	大変楽しく、ほんの少し時間があった。又、私持っているものも参加した。	学生の皆さんはみんな授業がはじまりがはじまりで、どんなふうにも参加した。	来日して僕もいろいろと楽しかった。日本語が話せるのが楽しかった。日本語を教えるというのを仕事にするのもおもしろいと思う。	来日して僕もいろいろと楽しかった。日本語が話せるのが楽しかった。日本語を教えるというのを仕事にするのもおもしろいと思う。	とても楽しいひと時だった。毎週の活動が楽しくて、それを通していろいろな文化の理解ができた。僕もいろいろな文化の理解ができた。	1度の参加だったが、学生さんも熱心に話しかけた。コミュニケーションしようとする姿勢が印象的だった。お茶や菓子を食べて、いろいろな話を聞いた。興味を持って、お茶や菓子を食べて、いろいろな話を聞いた。	何を話したかわからなかった。楽しかった。	話日が経つにつれて、話したことが思い出されてきた。話したことが思い出されてきた。	とても楽しかった。	とても楽しかった。	

質問1によると、計6回のうち、6回参加した人は1名、5回参加は1名、4回参加は2名、3回参加は1名、2回参加は3名、1回参加は6名であった。質問3の来学期の参加について「時間がある時」と答えた人が12名と最も多かったのを合わせて見ると、毎回継続的な参加より今回のように都合のつく人のみのボランティア参加のほうが参加しやすいことがわかる。

質問2と質問4では、ボランティアが日本人としての立場から留学生と接するという意識を強く持っていること、いろいろな国の人と話すのが楽しいということが現れている。

茶道、抹茶、和菓子、盆踊り、着物、ゆかた、年賀状、カルタあそび、豆まき、花見などの言葉がアンケートにでてくる。このようなことから日本の年中行事や伝統的な生活習慣に根ざしたものを留学生との交流に生かそうという姿勢がうかがわれる。また、いろいろな国の人、様々な文化、異文化の理解、国際情勢などへの指摘からは、日本人としての立場から外国人である留学生と接するという意識がうかがわれる。以上のことから、「話しましょう」という授業が、日本人と外国人という国や文化の違いに根ざした相互交流としてとらえられていたと言えよう。

5. 2. 2 ボランティアの募集・連絡

2000年秋学期は、留学生センターにアルバイトで来てくださっている方(学生でない民間人)がボランティアの取りまとめ役をしてくださり、ボランティアの呼びかけ・連絡をすべてしていただけた。ボランティア募集は民間人に呼びかけたい場合は地域の人脈が大切なので、そのような人脈のある方にあまりに負担にならない程度にお願いしたり、呼びかけに応じてくれた方々の名簿を作っておいて連絡したりするなどすると、うまくいくのではないかと思う。ボランティアの学生募集の場合は学内の掲示板に募集の紙を張ってもらうなどすればある程度集まってもらえる。

問題は、予備教育担当が毎年代わるので、ボランティア募集のノウハウなどが次の担当に引継がれないことだ。2000年度から2001年度は「話しましょう」ボランティア参加者の名簿を渡すなど意識的に引継ぎを行った。「話しましょう」を毎年同じ方針で運営しなくても、ボランティアの募集の仕方などノウハウとしての引継ぎは必要であろう。

また、ボランティアへの連絡方法で、コース終了後ボランティアの連絡役をしてくださった方から指摘されたことだが、連絡役の負担も考えて、電子メールでの連絡など連絡方法をもっと効率よくできるのではないかとのことであった。今回は、ボランティアの一人に連絡をお願いしたが、電子メールを日頃使っているボランティアには、仲介役を通さず直接メールでやりとりをしたほうが連絡役をするボランティアも教員も連絡の負担が軽くなる。

もう一つ、指摘されたのは、カリキュラムがある程度決まっていて今回はどんな活動をするのかわかったほうがボランティアは参加しやすいし、特技も生かせるのではないかということである。今回は、次の週に何をするかをはっきり決めるのは、毎週担当教員が話し合ってからであり、ボランティアへ内容の連絡は週ごとにしていた。しかし、ボランティアの側からは、学期を通して何をするのか、行事中心の活動なのか話すこと中心の活動なのかを知っておいたほうが、参加する際の心構えなどがはっきりできて参加しやすいとのことである。

6. これからの可能性・展望・課題

以上述べてきたような試みは教師側からみると、工夫、時間、労力が必要であり、ある意味では教科書にそった授業よりも大変である。しかし、学生にとっての楽しさ、息抜き、異文化体験、異文化交流など、教科書にはない反応の良さも十分感じられた。ボランティアの人集め、イベントのノウハウなど、最初の1～2年は大変でも、継続すれば経験が蓄積されるのでやりやすくなるであろう。本来の日本語の語学の授業とどちらを優先させるかという問題と内容をどうするかという問題が残るが、学生によっては、息抜きや「お楽しみ」を望んでいることもアンケートからわかった。より意欲的な学生には「面白い」よりも「役に立つ」要素を望む傾向があるようだが、いずれにしても「自然な日本語」、「もっと練習」を望んでいる学生が多いことから、教科書を離れた、より自然な環境での学習は価値があるであろう。

ボランティアも非常に熱心で、国際交流に意欲的であることはボランティアに対するアンケート結果からもうかがえる。口コミでもっと大きなボランティアの輪ができ、その中から都合の良いときに来てもらうというネットワークができれば、この種の試みもさらに発展すると思われる。

本論で述べた試みは学生に話す力をつけてもらいたいということから始まった。しかし「会話」の半分は「聞く」ことである。従ってもう一つの方向として発想を変え、ボランティアに何かについて話してもらい、学生は自然な日本語を「聞く」という機会をもっと与えてもいいのではないか。

また、学生、ボランティア、教師の三者が共に充実感が感じられるような活動をするために、これからも様々な試みに挑戦し、それをていねいに記録し将来のために残すことが大切である。

注

- (1) 筑波ランゲージグループ (1991-1992) SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE vol.1-3
- (2) 正宗鈴香 (1996) 「日本語教育における異文化理解プログラムの指導の試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第11号
- (3) S F J に沿った標準的な授業の流れは以下の通りである。課ごとに、語彙のチェック、Structure Drills (4～6コマ)、Conversation Drills (1～2コマ)、Tasks & Activities (1コマ) の順に進む。基本的な宿題は予習に Grammar Check、復習に Review Sheet などがある。その他の授業 (漢字、読解、作文など) も含めて、約3日間 (1コマは75分で、1日4コマで1課進む。4課ごとにクイズまたはテストがあり、初級24課を18週で終わる。

資料. アンケートのまとめ

*原文の一部を簡略したり、原文の意図を推測して補足したり、漢字表記にしたりした。

<積極的にこの時間に期待する>

- ・ This part is really very interesting.
- ・ Great and the teacher is very clever.
- ・ It is extremely important for us to learn to speak, especially when many of us felt intimidated initially. Many of us became more confident at the end and the exercise forces us to think in Japanese.
- ・ It's quite -- it's makes the class interesting and lovely.
- ・ It is very important, most of the students need to speak and listen to Nihongo but not to be able to write.
- ・ One of the most important skills is to be able to speak a language and that is only reached by a lot of 話します
- ・ It is a better way to speak with Japanese people during this class.
- ・ Effective to practice speaking in nihongo and to enrich the vocabulary.
- ・ 会話を、とくに、casual style は今少しだけできます。
- ・ This is a very good exercise. It removes the inhibitions of speaking Nihongo. It help in better communication.
- ・ This is very important since it can show how we can be able to organize Japanese grammar structures.

<現状を多少改善する形で期待する>

- ・ We need more exercise to practice speaking nihongo naturally.
- ・ This is a very important topic and students should be given more free time to talk and learn the spoken Japanese language.
- ・ Interesting but need more time to practice.
- ・ Speaking session should start immediately the course commences and be there at least twice in a week.
- ・ 話に練習することがもっとたくさんにしてほしいです。文法はだいじょうぶだと思いますが、話すとき、困ります。
- ・ For sure I like these classes but I think the subjects should be specified and achieved by all means. Actually I don't know how much do we learn during these classes.
- ・ Speaking is the only way to practice and learn Japanese. We do not practice enough in class.
- ・ 「話しましょう」のとき、free conversation in Nihongo among students must be utilized.
- ・ It's better to choose something relative to daily life, more.
- ・ 話す前にトピックが決まっていることが大切である (山崎判読訳)。
- ・ This is also important, however some of the topics in 話しましょう are not that interesting.
- ・ おもしろい topic in the (判読不能) is that it will be a たのしい event.
- ・ The topic should be given to the students before the class, so that it can be more focused.

<この時間についてもっと考える必要がある>

- ・ Still we can not say a full sentence fluently. We know the grammar but cannot explain it.
- ・ This class needs some preparations of the teachers and students.
- ・ It is probably better to know more conversation at the beginning of the class.
- ・ 目的性は要ります。
- ・ It's enough.

<その他>

- ・ It's necessary to give more emphasis to this because it's maybe the hardest part of learning a different language.
- ・ very important.
- ・ もっとクラスで練習を。